

弁当忘れてもノート忘れるな

鹿児島県志布志市

有限会社さかうえ

代表取締役 坂上 隆 さん

農業未経験者が農業を生業とした。坂上隆代表取締役（有限会社さかうえ）の農業スタイルはそこから築かれた。

*記録、記録、記録.....

素人である。当然、指示とおりに行う。種を蒔きなさい。30cm 間隔で蒔きなさい。はい。しかし、考えに考え、考えをまとめてから行動する坂上さん、ところで40cm 間隔、とか、15cm 間隔で蒔いてはいけないんですか。そう蒔くとどうなるんですか。聞いても返事は、とにかくいわれたとおりにやりなさい。はい。経験と勘で培われた人たちには、とにかく言われたとおりにやりなさい、としかいえない。そうすればうまくいくことを知っているからだ。理屈は説明できない。

小さなノートを常に持ち歩く。いわれたこと、作業したこと、それらをとにかく記録する。



30cm 間隔で蒔いた種が、どう生育し、どの段階で採取し、どう出荷したかを記録した。緻密に記録した。ノウハウの蓄積である。

*自分しかない

もう一点、周りを見た。50-60代が新人で、自分20代は一人。ズーッと子ども、というか孫扱い。自分が40、50になったとき誰がやるのだろうか。自分がこの地域の農業をすべてやらなければならない。それには、若い人ができる農業をやらなければならない。誰もができる農業をやらなければならない。組織をつくってやるしかない。そう直感した。

*行動を司る思考を積み重ねる

ここでがんばるしかない、と思ったら、課題がわんさか出てきた。一つひとつ解決するしかない。坂上さんが言う、行動を司る思考の積み重ねをまさに重ねる。積み重ねることにより考えがまとまれば、行動にうつる。行動にうつれば迷いはない。幾重にも考えたから臨機応変、突発的に出てくる問題もクリアできる。

*剣道が発想の土台

雰囲気は、横浜ベイスターズのエース、浜の番長こと、三浦投手風だが、話しぶりは、そう宣教師。聞けば、学生時代は剣道に明け暮れ、先の先を読む鍛錬を行い、一方で、神田古書街を歩き、相当に本を買い、読みふけたという。坐して思考し、面籠手をつけ対峙する相手との試合で実践力を養ってきた。

前はピーマンとか牛をやっていたが、今はやっていない。同じものをつくった方が毎年、精度が上がるし、繰り返した方が楽なことはわかっているが、やらないという。車生産なら代替技術、共有技術により、違う車種を作り出すことはそう無駄ではないだろうが、というと、例えばトヨタは新技術により新たな車をつくり生産システムも変化させ、これからも“車製造業”を続けるだろうし、私はそれを“農業”でやるだけだという。確かに坂上さんは、技術の進歩を取り入れた新たな生産システムをつくりだし、時代の思想の変化を見据えた生産方法を生み出している。さかうえ農業経営は進化している。しかし、違う種類の野菜づくりは、とあえて反論を試みても、いろいろな種類に移行できるのが農業であり、それが新たな経済活動に結びつく持論を曲げない。

一方で、ハウスは嫌いだからやらない。機械大好き人間だからトラクターでできる農業をやる（事務棟はプレハブ、機械棟は手づくりハウスだが、農業機械は一大財産、博物館



並みだ。修理室も完備）。畜産は休みが取れないからやめた。結果から見れば思考はシンプルだ。

*生産システムを売る

他に類を見ない事業を垣間見る。

事業案内に乗っていないビジネスがある。コンサルティング業だ。これは、社会、地域に対する恩返しであり、自己欲求ではなく他者からの要求にこたえる仕事であり、必要とされることを行う仕事だと独特の言い回しで説明する。

そして、弁当水筒を忘れてもプラスチックケースは忘れるな、と記録し続けたノート、“1億円ノート”をIT化した『農業工程管理システム』が販売されている。素人がつけ始めた小さなノートはプラスチックケース入りのノートに、表計算ソフトを使ったパソコンに、そしてパッケージ化され、管理システムとして経営の柱に成長した。素人がプロ農業人になった瞬間である。誰でもできる農業、若い人ができる農業にもつながる。

1億円ノートの謂われは、記録をシステム化しようとソフト業者に見積もらせたら2億円といわれ、臆していると、2千万円でやりますが著作権はください、といわれ、狙いはノウハウにあるなと思い、その価値から1億円ノートというようになったそうだ。

その内容をパンフレットから引用すると、計画栽培を実現するために必要な質・量・時間をプランし、納品までの工程を細かく分割し、必要時間を記録することからはじまるシステムだそうだ。勘ではなく帳簿管理だ。

*飼料販売と有機物循環農法

もう一つ特徴づけるのは、自社ブランド・サイロールの販売である。サイロールは、コーンスターチの原料であるデントコーンをバンカーサイロで乳酸発酵させるサイレージ化

を行い、ロールベラーで梱包したもので、畜産農家から利便性と肉質・乳質が向上する栄養性の高さが評価されている飼料である。

そしてさかうえの真骨頂が、この事業を行うことで有機物循環農法を完成させたことに現れていよう。

農産物の施肥は、サイロールを提供する畜産農家等から得る堆肥と、自社栽培のデントコーンを緑肥化した有機肥料とで行い、有機物を循環させ、さらに輪作により土壌消毒を減らし、土中の微生物相を豊かにしている。

記録をIT化した高度な育成管理システムと、機械好きが投資し続けた生産現場の機械化と、有機物循環型の土づくりによる高品質品の提供が、さかうえ農業経営である。これにより、『農業経営者A 1グランプリ』（農業技術通信社主催）2009大賞を受賞。

現在、作付面積は150ha。人は役員4名、社員27名、パート5名。

*さかうえモデルで全国展開

これからの動向が気になった。法人としては、農場を他に求め、今の経営システムをそこに移行し、運営するつもりだ。坂上さん自身は農業未経験で入ったが、若手社員には高校3年大学4年、あわせて7年間、農業を学んだ者もいる。知識の差が何より大きい。そして意欲もある。新しく確保する農場のトップは、そうした若者に任せるといふ。今、県内に目星をつけたところがあり、今年中にはスタートさせたいという。そして、担い手のいない地域があれば全国どこへでも、人と経営システムを転移させ、農業の発展と地域経済を活性化させたいと意気軒昂である。

個人としては、この4月から大学院生となり、農業経営を究める。坂上隆41歳、九州大学生物資源環境科学府『農業資源経済学専攻』に通い、生涯、学習と実践をし続ける土台を固めようとしている。

●-----●
本紙に関するお問合せは下記までご連絡ください。

アグリビジネス経営塾 特別版第9号

発行：社団法人日本農業法人協会



HP: <http://www.hojin.or.jp>

TEL: 03-6268-9500

FAX: 03-3237-6811

e-mail: juku@hojin.or.jp

©(社)日本農業法人協会2009

本紙記事の無断転載を禁止します。